

「貯水槽の群れ」

—2 稿—

2025/8/1

雨森 れに

〈人物表〉

金井かない
敦あつし

(35) 窓ガラスの清掃業者

宮下みやした
ゆうり

(17) 自殺願望を持つ大学生

管理人

(72) 雇われの管理人

1. マンション・屋上（朝）

都心にある古いマンションの屋上。屋上への扉は、鍵が壊されている。

中央で寝転がっている宮下ゆうり（17）。

屋上に現れる金井敦（35）。

ゆうりを見て驚く。

敦 「あの、窓清掃の準備で……」

ゆうり 「え？ ああ。タイミング最悪」

敦 「すみません。お知らせ、いってなかったですか？」

ゆうり、体を起こして、

ゆうり 「12時まで待てない？ 私、死ぬから」

2. マンション・管理室・室内（朝）

1階にある一般的な管理室。

管理人がタイムカードを押す。

窓口に座り、小型テレビをつける。

敦が管理室の窓を叩く。

敦 「ちょっといいですか」

管理人 「はいはい。いつもお世話様ね。場所はわかるでしょ？」

敦 「その、問題があつてですね……」

管理人が首を傾げる。

テレビからニュースが流れる。

アナウンサーの声 「緊急速報です。全国のビル、マンションの屋

上に若者が立っています。本日、12時に集団自殺が行

われる可能性があるとみています——」

管理人が敦と目を合わせる。

敦、静かに頷く。

管理人は震える手で、固定電話の受話器を取る。

敦 「警察が来たらすぐ飛ぶって言ってます」

管理人はあつけにとられた表情をし、受話器を戻す。

3. マンション・屋上（朝）

貯水槽の隣。

ゆうりは手すりから身を乗り出して、街を見下ろす。

街中をパトカーや消防車が走り回っている。
身を乗り出すのをやめ、手すり沿いに歩き出す。
鼻歌で『エーデルワイス』を歌いながら。

4.

マンション・階段・踊り場（朝）

屋上に繋がる扉の前。窓清掃の道具がまとめられている。

敦がゆうりの様子を伺っている。

胸ポケットで電話が鳴る。

敦 「もしもし。あ、はい。そうです。ええ。女の子がひとりです。……え？ 自分がですか？」

5.

マンション・屋上（昼）

ゆうりは、手すりの内側に座っている。視線は遠く、後ろにいる敦のことは気にしていない。

敦が一步近寄る。じやりつと音がする。

ゆうり 「ここだけ止めても無駄だよ」

ゆうりは振り向かない。

正面のマンションを指さす。

屋上に人影がある。

ゆうり 「あっちにもいるし」

正面右のビルを指さして、

ゆうり 「あっちも」

やはり屋上に人影がある。

ゆうり 「今は見えないだけで、もっと思ってると思うよ」

敦 「なんで今日、なんだよ……」

ゆうりが、ようやく敦を見る。

ゆうり 「（笑顔で）だから、タイミング最悪なんじゃん？」

敦は額を押さえる。

ゆうりが鼻歌を歌い始める。

敦、歌に気づいて、

敦 「エーデルワイス？」

ゆうり 「よくわかったね」

敦 「田舎で、お昼の音楽になってたから」

ゆうりは敦に体を向ける。

ゆうり「え、一緒。もしかして市内放送？」

敦「そうだよ。そっちも？」

ゆうり「うん。どこ出身？もしかして長野？」

敦「マジかよ。諏訪だけど」

ゆうり「同じ同じ！やば、偶然にもほどがあるんだけど」

敦の胸ポケットが震える。

敦はポケットを押さえ、ゆうりの楽しそうな顔をまじまじと見つめる。

敦「じゃあ、同郷のよしみでさ。自殺、やめてくれないかな」
ゆうり「それは無理でしょ」

ゆうりは白けた顔をする。

敦「俺だって止めたくないよ。死にたい奴は死ねばいい」

ゆうり「なんなの？やめろっていったり、死ねっていったり」

敦「俺は死にたいなら勝手にしろって思ってる。だけど、会社の方針ってもんがあるのよ」

敦が携帯を取り出して、見せる。

ゆうりは敦に興味を失い、背を向ける。

ゆうり「大人の、そういう部分が嫌いなんだよ」

敦「そのうち何とも思わなくなるよ」

ゆうり「そりゃ、地面と仲良くなったら何も思わないよね」

敦「（大きなため息をついて）お前らって、人の迷惑になってる自覚あんの？」

ゆうり「むしろ迷惑にならないようにだよ。社会不適合者が一気に

消えればラクでしょ？」

敦「それがみんなで仲良く死ぬ理由かよ」

ゆうりは答えない。

敦が腕時計を見る。時間は11時を指している。

敦は屋上を後にする。

ゆうりの存在を確かめるように、何度も振り返りながら。

6.

マンション・管理室前（昼）

敦が、管理人に頭を下げ、出ていく。

× × ×

敦が戻ってくる。手にはコンビニ袋。

7.

マンション・階段（昼）

敦が屋上へ向かっている。

8.

マンション・屋上（昼）

敦が屋上に到着する。

ゆうりは変わらず景色を眺めている。

敦 「死ぬ前に、飯どう？」

ゆうり 「やだよ。中身出たら汚いじゃん」

敦 「なら、そもそも飛び降りが違うだろうって」

敦は、ゆうりと2メートルほど距離を取って座る。

コンビニ袋からおにぎりを取り出し、食べ始める。

ゆうり、ちらりと見て、

ゆうり 「むしろ、よく食べれんね」

敦は答えず、もくもくと食べ続ける。

ゆうりは軽く息を吐く。そして、視界に入るビルの

屋上を、ひとつひとつ眺める。

ゆうりと同じように座り込んでいる者。何度も下を

確認する者。もう飛び降りそうな者。警察に囲まれ

ている者——それぞれがその時を待っている。

ゆうり 「貯水槽みたい」

敦 「なに？」

ゆうり 「屋上にひとりずついてさ」

敦がまわりを見渡す。

敦 「おもしろいこと考えるんだな」

ゆうり 「発想力には自信があんの」

敦 「自分が死なない世界線は考えないわけ？」

ゆうり 「もう考え尽くしたし、疲れた」

ゆうりは時間を確認しようとする。しかし、携帯の

充電が切れていて、わからない。

ゆうり 「（振り向いて）ねえ、今何時？」

敦は腕時計を確認する。

敦 「12時まで、あと5分」

敦が『エーデルワイス』を歌いだす。

ゆうり 「歌詞まで覚えてんだ」

敦は歌い続ける。

ゆうりは歌声を聞きながら、目を閉じる。

そして覚悟を決めたように目を開ける。

正面マンションの屋上から、人が落ちていく。

次に正面右のビルから人が落ちる。

それから止まることなく、人の雨が降っていく。

ゆうりは慌てて立ち上がり、手すりに駆け寄る。

敦がゆうりの腕を掴む。

ゆうり 「やだ！ 離して！」

敦 「下、見てみるよ」

ゆうりが下を見る。そして、ゆっくりと敦を見る。

顔は青白く、唇が震えている。

周囲のビルから飛び降りる人間はもういない。

サイレンが響き渡っている。

敦 「みんなできないなら、意味ないんじゃない」

ゆうり 「今からでも——」

しかし、ゆうりは敦を振り払うことも、手すりを越

えることもできない。

敦 「……貯水槽って、ちゃんと役目があんの。知ってる？」

ゆうりが目を見開く。

敦 「お前にもなんかあるよ。きつと」

敦がおにぎりを差し出す。

ゆうり 「無責任……」

ゆうり、震える手でおにぎりを受け取る。

9.

都会のビル群（夕）

ビルの上にある、様々な貯水槽。

昼間の騒動を感じさせない、綺麗な夕焼け。

おわり